

『平家物語』 卷第一 「御輿振」の変容とその背景

—— 屋代本より語り本の展開過程に及ぶ ——

鈴木 彰

一 はじめに

本稿は『平家物語』が持つ多くの側面のうち、特に本文の動態性に着目し、物語が様々に変容を遂げた過程の一面を照らし出そうとするものである。現存する数多くの異本を通して、この作品が、ひとたび成立した後も、受容の過程において様々なレベルで改作・改訂がなされていったことは容易に推察し得るところである。殊に『平家』という作品は中世を通じてなぜかくも動態的であり続けたのか。そうした問いに向き合うためには、現存する各本が伝える形態に至る本文形成の実態を具体的に照らし出し、諸本文のあわいにおける相対的な色彩をそれぞれに明らかにしていくことも必要ではなからうか。

さて、標題に掲げた通り、本稿では巻第一「御輿振」の記述を取り挙げ、まずは現存屋代本の位相について再吟味を試みる。また、その過程で浮上する語り本特有の設定をめぐって、それが形成された条件やそこに作用した力について些か推考してみようと

思うのである。現在、屋代本は語り本の古態を多く残すとの評価が定着している。但し、既に指摘があるように⁽¹⁾、それはあくまでも相対的な濃淡の問題でしかなく、本稿もその点を再確認することから論述を始めることとなる。また、こうした屋代本の検討次第では、従来あまり注意が払われてこなかった角度から、物語受容や本文展開などの様相を把握する道筋が開けるように思うのである。最後には、そうした点について見通しを述べてみたい。

二 閑院殿と大内裏と

加賀国鶴河における寺僧と目代との争いは、白山を介して山門をも巻き込んだ大騒動へと発展、安元三年四月十三日、山門の大衆は加賀国国司師高及び目代師経の処罰を求め、神輿を捧げて下洛することとなる。いわゆる「御輿振」の場面だが、その大衆入洛の様相を屋代本は左のように語っている⁽²⁾。

…神輿ハ一条ヲ西へ入セ給フ。御神宝ハ天ニ耀テ、日月地ニ落給ヘルカト驚カル。皇居、閑院殿ニテ坐シケレバ、御輿ヲ

閑院殿へ向奉ル。源平両家ノ大將軍、臨時勅ヲ承テ大衆ヲ防グ。平家ニハ小松内大臣重盛、三千余騎ニテ東西南ヲ固メラル。源氏ニハ大内守護ノ右京大夫頼政、三百余騎ニテ二条面縫殿陣ヲ固メケル。大地ハ広シ、勢ハ少シ、マバラニコソ見タリケレ。大衆、無勢タルニヨテ縫殿陣ニ御與ヲ向奉ル。閑院殿は二条南、西洞院西に位置していた〔拾芥抄〕。従つて、大衆が「皇居」たる「閑院殿」を目指して歩を進めるといふ傍線部の記述は、頼政が「二条面」を固めたとする設定と呼応している。また、頼政の他に重盛が「東西南」を固めたともあるように、ここには閑院殿の四面を源平が守護するという状況が描き出されていることにならう。

ところで、右の叙述の中には些か不審な点が存在する。まず、二条大路に面する閑院殿を目指すのに、大衆は何故「二条ヲ西へ」進んだとされるのかという点である。このコースを通る場合、少なくともあと一度の左折を経なければ閑院殿に行き着けない。高野川・賀茂川に沿つて南下してきた大衆の進路としては、そのように右左折を繰り返す道順よりも、二条大路まで下り、そこで一度右折した後、そのまま閑院殿まで直進する方が理にかなつてゐるのではないか。実際のこの事件で、大衆はまさしく二条を西進するコースを辿つていたという事実を思い合わせるとき、ここに決定的な錯誤が生じているとまでは言い難いものの、右に述べたような印象は強くならう。

その一方で、頼政が「二条面縫殿陣」を固めたという表現は、事件当時の閑院殿の状況としては混乱を内包している。即ち、閑

院殿の北門が「二条面」であることはよいにしても、一般に「縫殿陣」とは北に縫殿寮を持つが故の朔平門の異称であり〔拾芥抄〕、閑院殿北門の名としては相応しくないのである。

但し、ここでは鎌倉期の閑院殿の変遷をたどつておかねばならない。仁安二（一一六七）年十二月十日、摂政基房によつて再建された〔玉葉〕。閑院殿は、高倉天皇の即位後里内裏として用いられていくが、承元二（一一〇八）年十一月二十七日に焼失する〔猪隈閑白記〕『明月記』他。しかし、建暦三（一一二三）年には実朝によつて新造され、二月廿七日には順徳天皇が遷幸している。注目すべきは、この時の様子が「今、度大略模大内」〔仁和寺御日次記〕、「今、度、多被模大内」〔遷幸部類記〕所引「権中納言光親御記」と記されていることで、これ以前の閑院殿は内裏と通じる様式ではなかつたことが推察されよう。実際、この建暦の再建は『古今著聞集』巻第十一画図第十六の386話にも、「承元に閑院の皇居焼て、即造内裏ありけるに、本は尋常の式の屋に松殿作らせ給たりけるを、此、度、あらためて、大内に模して、紫宸・清涼・宣陽・校書殿・弓場・陣座など、要須の所くたてそへられける」と綴られてもゐる。

閑院殿はこの後も宝治三（一一四九）年二月一日に焼失するが、建長三（一一五二）年六月廿七日には幕府によつて新造された御所への遷幸がなる〔百鍊抄〕。この建長の造営もまた内裏を模さんとしたもので、『吾妻鏡』建長二年三月一日条に掲載される造営雑目録によつて、その具体的相貌を窺うことができる。そして、同日録の中の「縫殿陣土平門 但馬次郎左衛門尉」との記述

に従えば、建長造営の閑院殿には縫殿陣が造られていたものと推察されよう。また、宝治の焼亡を伝える『岡屋閑白記』には、「今度回禄出来自縫殿陣北面妻戸内」とあり、建暦造営の閑院殿にも縫殿陣が存在していたことが確かめられる。

しかし、先に確認したように、内裏を模した建暦造営の閑院殿はそれ以前の造りとは大きく異なるものなのであった。とすれば、御輿振事件当時、閑院殿に「縫殿陣」があったとする屋代本の記述は、やはり些か不審とせねばなるまい。

こうした不自然さは何に由来するのであろうか。予め言えば、屋代本のこの部分は、大内裏を舞台とする本文の上に、閑院殿という要素を後次的に上塗りしたものであり、そこに混乱の源があると思われるのである。以下、その点について検討を加えていこうと思うのだが、まずは、事件の舞台と、入浴した大衆が通った道筋との関係性に着目しながら、他の『平家』諸本の叙述を概観しておきたい。

延慶本・長門本では、舞台は前述のごとく閑院殿。ここでは、「西坂本」から「東北院、法城寺ノ辺」に充滿した大衆が閑院殿へ神輿を向け、「二条烏丸、室町辺二近キ御ス」と記される。地理的に東北院や法成寺は一条大路より南に位置しており、また「二条烏丸、室町」という表現は、大衆が東から西へと次第に閑院殿に接近する様を想わせる。とすれば、ここで大衆は二条大路を西へ進んでいると解釈するのが最も妥当であろう。そして、その道筋は、閑院殿を舞台とすることと密に関わり、滑らかに照応していることにも留意したい。⁵⁾

閑院殿を舞台とするのは、これら二本の他には前掲屋代本と南都本である。南都本巻第一は屋代本の本文をも受け継ぐ混態本であるとの指摘があるので今は措く。これら以外の諸本(覚一本やその後出本、八坂系第一・二類本(以下八坂系本)、四部合戦状本、源平盛衰記、源平闘諍録)は大内裏を舞台とする点で一致している。それは重盛を筆頭とする平家の軍勢が陽明門以下を固めたという記述によつて判然とするのであるが、ここでは特に、語り本が等しく大内裏としていることを考えれば、屋代本の閑院殿という設定がその中であつて際立っていることに注意すべきであらう。

さて、覚一本や八坂系本といった語り本は、いずれも大衆が「二条を西へ」進んだと記している。この点、先の延慶本とは異なるわけだが、最初に大衆と対する頼政が御所の北を守護していること(諸本共通)を踏まえると、こうした道順には、大内裏を事件の舞台とする設定との響き合いが認められよう。つまり、一条を西へ進むという表現は、本質的に大内裏を舞台とする叙述の中でこそ有効な意味を持つものと思われるのである。

以上のように、語り本と延慶本との間、換言すれば舞台を大内裏とするか閑院殿とするかには、その場面描出の方法に大きな隔たりが存することが知られよう。そしていずれの形であれ、入浴後の大衆の道筋は、事件の舞台との関係から有効に意味付けられているのである。以上を踏まえて屋代本の記述を振り返ってみよう。

同本で大衆は「一条ヲ西へ」進み、「閑院殿」を目指す。「閑院

殿^一では、北門に当たる「二条面縫殿陣」を頼政が固めている。諸本の記述を見渡すとき、「閑院殿」「二条面」は延慶本の設定に通じ、「一条ヲ西へ」「縫殿陣」は大内裏を舞台とする語り本に重なっていることに気が付く。つまり、屋代本には趣向を異にする二種類の本文それぞれ要素が混在しているのである。そしてまさしくそこに不自然さが認められるのであった。

この部分に関して、富倉徳次郎氏が一つの見解を提示している。⁽²⁾氏はこれを「閑院内裏と大内裏との混乱から来たもの」とし、その上で、「こうした誤りをも」となって、語り本から「閑院内裏」の語が消え、大内裏を舞台とする設定が生まれたこと、それに伴って重盛が守護する場として陽明門以下が導かれ、かつ頼政が固めた門に関しては「二条面」の語が消えて縫殿陣が残った、という過程を想定されている。その論述をたどる限り、氏はこの部分についても屋代本の形が他の語り本に先行するという前提に立っていると思われる。また、続けて氏は「こうした調査は語りもの系十二巻本が、ある種の下よみもの系をもとに整理されたものであることを証明している」とも述べている。屋代本が延慶本と同じく閑院殿を舞台とすることから、この部分に何らかの系譜的關係を想定し、これを覚一本のごとき形態の成立に至る過渡的な姿と捉えているのであろう。

右に言う「閑院内裏と大内裏との混乱」が如何なるものであるか、必ずしも明確ではないのだが、①大内裏の位置に閑院内裏が存在し、②その閑院内裏にも「縫殿陣」が存在するという誤解（もしくは無理解）が生じていると、いうことであらうか。①が

「一条ヲ西へ」と、②は当然「縫殿陣」と関わる。しかし、屋代本には、重盛が固めた「東西南」とは別の「二条面縫殿陣」という表現も同時に存在していることに注意したい。それは「閑院殿」の北門が「二条面」にあるとする表現なのである。従って、この部分の不自然さは、御所（閑院殿）が右の①②のごとく大内裏の位置にあるとする誤解と、閑院内裏の正確な位置にあるとする理解とが混在しているところに由来するとみるのが妥当であらう。

先に閑院殿と大内裏と、両者を舞台とする他諸本の記述を概観した。それらの表現の綿密さと、両者の間の趣向面での距離を改めて想起するとき、こうした混乱を含んだ記述が形成される過程としては、大内裏を舞台とする本文と、「閑院殿」「二条面」という要素とが融合したと考えるのが最も自然なところではあるまいか。舞台を大きく違える二形態の間には、それ相応に確かな志向に基づく改編が施されたものと推察される。また、閑院殿へ向かうのに一条を西へ進むような叙述が一面的な誤解だけでは生じ得ないことも既にみた通りである。以上を勘案すれば、これが一方から他方への過渡的な形態である可能性は極めて低いと判断せざるを得まい。

この本文交渉の際、基調となつたのは大内裏を舞台とする語り本のごとき本文であつたと思われる。それは屋代本が基本的に語り本系本文を持つことから類推できようが、今少し掘り下げるとすれば、御所を守護する源平の配置に注目できよう。延慶本では重盛が御所の「東面左衛門陣」を、頼政が「北ノ陣」を守護し

たとされるのみであるが、語り本では等しく彼らが御所の四方を固める様が記されている。その点、屋代本で重盛が御所の「東西南」を、頼政が北門たる「二条面縫殿陣」を守護するのと通底しているのである。加えて盛衰記・四部本・闕諍録が大内裏を舞台としつつも四方守護の趣向を持たないことをも考慮すれば、この部分の記述は語り本の特性を根底に有すると言えるであらう。

以上、屋代本の混乱が、事件の舞台に関して別の設定を持つ本文との交渉に由来することを検証してきた。この部分の屋代本の記述が、必ずしも語り本の展開過程で本来的な形とは言えないことが明らかになったものと思う。こうした現存屋代本の位相と共に、本文交渉という現象が既に屋代本の中にも見いだせることの意味の重さに注目しておきたい。

三 鶴退治説話の位置

屋代本の「御輿振」には、前節で見たとくとは別に、後次に位置を操作したものと思しき記事が存在する。それは、摂津堅者豪雲の口から発される頼政評の中に現れる、いわゆる鶴退治説話である。少々長くなるが、まずは屋代本から豪雲の言葉を引用しておく。

「尤サイハレタリ。神輿ヲ陣頭ニ振奉テ訴詔ヲイタス程ナラバ、大勢ノ中ヲ推破テコソ後代ノ聞モアラムズレ。中ニモ此頼政ハ、六孫王ヨリ源氏嫡々ノ正統也。弓箭ヲ取テ未_レ聞_レ其不覚ヲ一。剩_レ工歌道ノ達者ニテアンナルゾ。(A)【二条院ノ御時、鶴ト云鳥宮中ニ鳴テ、屢バ奉_レ惱_レ震様。公卿僉議有テ、頼政

ヲ召シテ射サセラル。頼政是ヲ射ントスルニ、比ハ五月廿日余ノ暗ナリケレバ、体モ形モ不見分_レシテ、何クヲ矢ツボトモ難_レ定。サレドモ大ノ鎭ヲ以テ、鶴ノ声スル方ヲ射ル。鶴ハ鎭ノ音ニ驚テ御坪ノ方へ響テ落ケルヲ、二ノ矢ニ躓テ小鎭ヲ取テ番テ、ヒフツト射落ス。主上御感ノ余リニ御衣ヲカツケサセ給フニ、大炊御門ノ右大臣公能給ハリツイデ、頼政ニタブトテ、昔ノ養由ハ雲外ノ雁ヲ射キ、今ノ頼政ハ雨ノ中ニ鶴ヲ得タリト仰ラレテ、

五月ヤミ名ヲアラハセル今宵カナ

ト仰カケラレタリケレバ、

タソガレドキモ過ヌトモヘバ

ト仕テ、御衣ヲ給テゾ出ニケル。(B)又近衛ノ院ノ御在位ノ時、当座ノ御会ノ有ケルニ、深山ノ花ト云題ヲ被_レ出タリケルニ、人々読ミワツラヒタリケレドモ、頼政祝歌ニ読タリケリ。

深山木ノ其ノ梢トモワカザリシ桜ハ花ニアラハレニケリト云名歌仕テ御感ニアツカル程ノヤサ男ニ、如何カ臨時ニデ情ナウ恥辱ヲバアタウベキ。此御輿昇返シ奉_レレヤ」ト云ケレバ、

右引用中、【】で括り(A)とした部分が問題の記事である。まずは、続く「深山木の」の歌話(B)と併せて、諸本の状況を把握しておこう。(B)は大半の諸本で巻第一のこの位置にあり、頼政の歌人としての側面を語るエピソードとして機能しているものである。一方、(A)は頼政の死後、生前を回想する形で巻第四に置かれてい

る場合が多く、覚一本や八坂系本、延慶本などはいずれもこうした形をとる。それに対して、巻第一にこれを有するのは、前掲屋代本のほか、長門本・源平闘諍録・四部合戦状本・竹柏園本・南都本である。このうち、四部合戦状本のこの部分の記述には後次性が認められ、長門本・闘諍録はここに本話を含めた頼政の和歌関係語を集約的に記すという整理を施している。屋代本の本文をも継承する混態本と見なされる竹柏園本・南都本と併せて、かかる他本の特殊な様相を考えれば、屋代本における当該記事の位置が、諸本中でも特異なものに属することが確認できよう。

こうした位置付けは、従来、屋代本の古態性との関係で理解されてきたようである。即ち、諸本展開の過程で当該記事は巻第一から巻第四に移されたとする理解である。¹²しかし、右のような諸本の状況に占める屋代本の特殊性を視野に収めると、そうした理解の妥当性を再考する必要があるのである。改めてその本文を振り返ってみたい。

まず、巻第四におけるこの話が頼政の如何なる側面を照らし出すものとして機能しているかを延慶本を通して確かめておきたい。ここでは和歌による昇殿と三位昇進が語られ、「此人ノ一期ノ高名トオボシキ事」として二つの説話が統括されている。近衛院の御惱にまつわる第一の話においては、「…然レバ、先例、二任、セ、テ、武士ニ仰テ警固アルベシ」トテ、源平両家ノ中ヲ選セラレケルニ、此頼政ゾエラビ出サレタル」とあり、堀河天皇の時の義家に准えられて、頼政が「変化ノ者」に対すべき「武士」として選ばれている。そして、弓術を以てそれを退治した彼は、勲賞を受ける際

の巧みな連歌と併せて、『凡此頼政ハ、武芸ニモカギラズ、歌道ニモ勝レタリ』トゾ、人々感ゼラレケル」と評されることとなる。続く第二の話が(A)に相当する二条天皇の時の鶴退治話だが、「然レバ先例、二任、セ、テ、頼政ヲ召レケル」とあるように、明らかに第一の話の延長線上にその性格を認めることができよう。こうして見ると、鶴退治話は義家の話と「先例」という語を媒介として連なっているわけで（傍点部）、基本的には頼政の武の側面を語るものとして存在していると思われるのである。こうした各記事間の脈絡は、覚一本や八坂系本でも変わりはない。当該話に、右二重傍線部に言われるような文武兼備を語る側面があることは否めないが、頼政の武芸を言う文脈がその根底を支えていることに留意しておきたい。そうした側面は、たとえ単独話としてあっても基本的には変わるまい。¹³

さて、問題の(A)は屋代本でどのように位置付けられているのであろうか。その導入部では、頼政が武芸に長じていることが述べられた後、「剩工歌道ノ達者ニテアンナルゾ」（傍線部）と、その和歌の才能に話題が転じられ、(A)が導かれている。また、豪雲は(A)・(B)を語った後に頼政を「ヤサ男」とも評している。かかる文脈に従えば、(A)は(B)と共に頼政の和歌の才を語る話として位置づけられていることが読み取れよう。しかし、先に確認した通り、(A)には頼政の武芸を言う脈絡が色濃く存在しているのである。それは頼政が「歌道ノ達者」「ヤサ男」たることを述べる文脈には馴染まぬものであろう。さらに、屋代本はこうした色彩を持つ(A)を、まさしく頼政の歌才を示す話である(B)に先立って持ち出して

おり、その点も些か滑らかさに欠けるように思われる。傍線部の後、直ちに(B)を続ける他諸本との隔たりは小さくあるまい。

(A)・(B)の記事順は、時代設定の面からみても無自覚に選ばれたものとは思われない。即ち、(A)の「二条院ノ御時」が保元三(一一五八)年〜永万元(一一六五)年なのに対して、(B)の「近衛院ノ御在位ノ時」は永治元(一一四二)年〜久寿元(一一五五)年であり、両記事は年代順を逆に行っているのである。頼政の歌才を語るという目的を共有しているにもかかわらず、敢えてこうした順とされるからには、(A)・(B)いずれかの位置付けと関わる、何らかの必然性が存在したと考えるのが自然であろう。(A)は頼政の才を武・文の順に語るものだが、仮にこれを(B)の後に置く場合、その間の内容上の凹凸は現存形態にも増して大きくなることは明らかである。また、先に見たような記事そのものの性格やそれに伴う文脈上の振幅、更には位置に関する諸本間での特殊性などをも考え合わせると、事は(A)をここに挟み込もうとする志向に関わるものと推察されるのである。とすれば、頼政に弓箭の不覚なしという直前の言葉との関係で、(A)に語られる武の側面を定位しようとしたものとも思われる。

現存屋代本はそうした操作を経た形態を伝えていることに注意しなければなるまい。ここには屋代本の古態性よりも、むしろ後次の改編作業を想定すべきであろう¹⁷。従来のように、これを本来的な形とする前提の下で語り本の展開過程を把握するのは短絡的に過ぎるのではないか。前節に述べた部分と併せて、屋代本の「御輿振」には現存本の位相を測る上で見逃し難い現象が認めら

れることを繰り返し述べておきたい。

四 大内裏の選択と『平治物語』

前節までには、屋代本巻第一「御輿振」の本文が必ずしも本来的な形とは言えず、ある段階での改編を経たものであることを検証してきた。それは語り本の展開過程に占める、屋代本の位相を画一的に捉えることに改めて注意を促すものと言えよう。また、

こうした事実は、見方を変えれば、屋代本を溯る時点で既に様々な形で本文の交渉が進行していたという注目すべき実態をものもたつてもいる。本節では改めて御輿振事件の舞台設定に視線を向け、そこに見られる本文変容の背景について一つの可能性を探ること、特に語り本の展開過程の一側面を今少し追究してみたい。

大内裏を事件の舞台とする語り本は、いずれも頼政が守護したのを「縫殿陣」と記するのであるが、これは内裏の北門であるという点で、重盛らが固めた陽明・待賢・郁芳門といった大内裏の門とは性格を異にしている。こうした点を見ると、語り本では大内裏の北門については細かな意が払われていないことが窺われよう。大内裏の荒廃は十三世紀に急速に進んだことが指摘されており、また閑院殿も正元元(一二五九)年五月廿二日の焼失が伝えられる『百鍊抄』。御所としての実体が失われ、時が隔たることによって、これらに関する詳細な理解が徐々に失われていったことは想像に難くない。こうした事情を背景とすること、混乱を含んだ表現が様々に創造され、かつその形で享受され得たのである。語り本はいずれも、事件の舞台となる御所の実体への稀薄

な理解を条件としてその表現を成り立たせていることに注意したい。延慶本のごとき形を、物語のより本来的な姿とみるならば、諸本展開の過程において、閑院殿から大内裏へという舞台の転換が行われたものと推測されるわけだが、そうした改編として右に述べたような事情と無関係ではなかっただろう。閑院殿ではなく、大内裏をより相応しい舞台と判断した際、そこに立ち現れていたのは言わば幻想としての大内裏であつたと思われるからである。

ところで、語り本で大内裏が選択されたことに関しては、もう一つ別の可能性を探ることができそうである。その点と関わって注目されるのが、御所の四方を源平が守護するという、語り本のみ見える設定である。例えば、前述の通り、延慶本に御所の南・西を武士が守護する様は記されていない。この部分の屋代本が必ずしも本来的な形態を止めているとは見なし難いことは既に確認した。その点は、重盛ひとりで「東西南」を守護する軍勢を指揮するといふ、冷静に考えれば少々強引にも見える設定にも窺えよう。従つて、まず検討すべきは覚一本と八坂系本の叙述といふことにならう。当該部分を覚一本・八坂系一類本（三条西家本）・二類本（城方本）の順に引用する。

（覚一本）是によつて、源平両家の大將軍、四方の陣頭をかためて、大衆ふせぐべき由仰下さる。平家には、小松の内大臣の左大將重盛公、其勢三千余騎にて、大宮面の陽明・待賢・郁芳三の門をかため給ふ。弟宗盛・知盛・重衡、伯父頼盛・教盛・経盛などは、にし南の陣をかためられけり。源氏には、大内守護の源三位頼政卿、渡辺のはぶく・さづくをむね

として、其勢纒に、三百余騎、北の門、縫殿の陣をかため給ふ。所はひろし勢は少し、まばらにこそみえたりけれ。

（一類本）くわうきよには、げんべいりやうかの大しやうぐんちよくをうけたまはりて、四方のぢんをかためて大衆をふせぐ。平氏には小松殿、三千余きの勢にてひんがしおもてやうめい・たいけん・いうはう、三の門をかためらる。左衛門のかみよりもり一千よきにて南のぢんをかためらる。平宰相教盛千よきにてにし門をかためらる。源氏には大内の守護源三位頼政、わたなべたうはぶく・さづく・となうなどをはじめとして、つがうそのせい三百よき、きたおもてぬいどの、ぢんをかためたり。おほぢはひろしせいはずくなし、もてのほかにまばらにこそみえたりけれ。

（二類本）皇居には源平両家の大將軍勅を承て四方の門をかためて大衆をふせぐ。平氏には小松殿三千余騎にて東面の陣、陽明・待賢・郁芳三の門をかためらる。右衛門督頼盛一千余騎にて南面の陣をかためらる。平宰相教盛これも一千余騎にて西面の陣をかためらる。源氏には大内守護の源三位頼政、渡辺の省・授を先として、都合其勢三百余騎北面縫殿の陣を堅めて大衆をふせぐ。大路ひろし勢はずくなし、まばらにこそみえたりけれ。

いづれも御所の四方を源平が守護するという共通性を持つものの、覚一本はここで源平の多寡を対比することに焦点を合わせていると言えよう。宗盛以下の一門を列挙する独特な在り方は、他本にはない「纒に」（榜点部）という表現と共に、そうした色合い

を強く表出している。それに対して八坂系本は重盛・頼盛・教盛の三人の名を、それぞれ軍勢を率い、各々の陣を守護したものとして挙げており、そこには覚一本とも連つた特徴的な設定を認めることができる。

ところで、八坂系本では重盛の他に、なぜ頼盛と教盛が取り立てて記されているのであろうか。ここで想起されるのが『平治物語』に描かれる大將軍としての三人の姿である。

(a) 六波羅より左衛門佐重盛・三河守頼盛・常陸守教盛、その勢三百騎ばかりにて、土御門東の洞院にて参合。さてこそ、君も安堵の御心つかせましくけり。(180)

(b) 此勅定をうけたまはりて、六波羅よりむかふ大將軍には、左衛門佐重盛・三河守頼盛・常陸守教盛、三人なり。その勢三千余騎、六条河原へうちいで、馬の鼻を西へ向てぞひかへたり。…(中略)…此大勢、河原を上りに、近衛・中御門、二つの大路より大宮面へをしよせてみれば、陽明・待賢・郁芳門、三の門をぞひらきける。(184・185)

右は古態本(陽明文庫本)からの引用である。(b)に見えるように、この三人は大内裏攻撃に向かう大將軍として扱われている。更に、作中でこの三人は並記されることが多く(a)もその一例)、その点の後出本にも継承されていくこととなる。『平治』の享受過程では、この三者を一括して捉える視線が十分に培われていたことがここから推察されよう。

改めて振り返れば、語り本『平家』に描かれる彼らの姿は、大内裏に押し寄せる山門の大衆に対峙するというものであった。

『平治』での彼らの姿は、まさしくその裏返ししの位置に見込るのである。御興振事件当時の記録類からは頼盛や教盛の行動は定かではない。また何よりも、『平家』における彼らは武人としての側面を決して強くは有していないのである。こうした諸要素を考え合わせても、八坂系本でこの三人が大内裏を守護する武士として選ばれている背景に、『平治』の作用を看取し得るようと思われるのである。

八坂系本は頼盛・教盛に個別の軍勢を与え、各々一つの陣を守護する役割を担わせており、他本に比べてみても、彼らが重い位置を占めていることは明らかである。そうした彼らの存在を介すれば、ここで戦略的にはさして重要とも思われない南・西という方角が敢えて持ち出される意味(即ち御所の四方守護の趣向の必然性)も理解できるのである。再び覚一本に目を転ずるに、ここでも「西南の陣」が問題視され、頼盛・教盛の名も見えるものもの、こうした意味付けは読み取り難い。また、前述のごとく源平の對比に傾斜したその叙述が、他諸本の基盤となつたとも考え難からう。とすれば、八坂系本の形は閑院殿から大内裏への転換を促した力、即ち、語り本『平家』の本文形成に与えた『平治』の影響を示唆していると考えられるのではあるまいか。右に述べた問題は、諸本展開過程に関する従来の理解の再吟味とも当然関わるもので、今後別の側面からの更なる検討が必要となろうが、ここではまず一つの可能性を提示してみた次第である。

五 おわりに

本稿では、屋代本巻第一「御輿振」の叙述には後代的な本文操作の形跡が存することや、そこには例えば延慶本のごとき本文との部分的な交渉関係も想定されることなどを述べ、その上で大内裏を事件の舞台とする語り本の記述が形成された背景について少しく検討を加えてみた。本文交渉の様相は、覚一本の影響力の強さが際立っているがゆえか、より時代の下った時点で現象として把握されることが多かったように思う。しかし、本稿で試みた僅かな検討によっても、既に屋代本以前の段階でもこれに類した現象が生じていたことが窺えるのである。今回はごく限られた部分での検討に止まったが、こうした現象は屋代本の他巻の記述中にも散見する。それらについては別の機会に指摘していこうと思うが、現存屋代本の位相を語り本の展開過程に測る作業は、今後大きな課題の一つとなろう。もちろん、本稿には、屋代本が他の語り本に先行する叙述を相対的に多く有することを否定する意図はない。ただ、現存『平家』諸本がいずれも複雑な本文交渉を経た結果、多彩な色を上塗りされた段階にあることに鑑みれば、そうした各段階での実態に可能な限り即した形で作品世界に光を当てていく必要を感じるのである。

ところで、右のような試みをなすに当たり、諸本それぞれの抱える時代性が重要な鍵を握るであろうことは想像に難くない。とすれば、屋代本が応永（二二九四—一四二八）頃の写しかと言われる⁽²⁾ことにも、より自覚的になつてよいのではないか。その妥当性を

疑つてみる必要はあるにせよ、例えば応安四（二二七二）年成立とされる覚一本との本文的距離を勘案すれば、そこから十四世紀の状況を様々に見通し得るのではないか。また、旧稿で指摘してきたように、八坂系本はその叙述に屋代本との共通性を含み持つており、同様の時代状況との関わりの中でその表現を吟味してみれば十分存するであろう。本稿はそうした見通しに立つた試みの一環にあるものである。いずれにせよ、『平家』が抱えた動態性の実に長期的なることを受け止め、今後は諸本の抱える年代性やその叙述に反映される当代性を意識しつつ、その多彩なる実態を掘り下げていかねばなるまい。

注(1) 千明守氏「屋代本平家物語の成立——屋代本の古態性の検証・巻

三「小督局事」を中心として——」（『平家物語の成立 あなたが読む平家物語』）収一九九三・一一「有精堂」同『平家物語』巻七（都落ち）の考察——屋代本古態説の検証——」（『單記と語り物』30 一九九四・三）など。

(2) 屋代本の引用は『屋代本高野本対照平家物語』（一九九〇・五 新興社）によるが、貴重古典叢刊の影印本を参照し、一部表記を改めた。また、私に濁点等を実施した。

(3) 『愚昧記』安元三年四月十三日条。陽明叢書記録文書篇『平記・大府記・永昌記・愚昧記』（一九八八・五 思文閣出版）を参照した。本記事に関しては、赤松俊秀氏「頼政説話について（上）（下）——平家物語の原本についての統論——」（『文学』40—7、8 一九七二・七、八）、早川厚一氏『平家物語』の成立——鹿谷事件と二条・高倉兩帝の造形について——」（『名古屋学院大学論集』人文・自然科学篇24—1 一九八七・六）に紹介がある。

(4) 延慶本の引用は『延慶本平家物語 本文篇』(一九九〇・六勉誠社)による。

なお、当該部分の長門本には延慶本にはない、「白玉、金鏡、緑羅、紅絹をかざり奉る。神輿あさ日の光にかざりて、日月の地におち給ふかどあやまつ。一条を西へ入せ給ひける」という一節が存在する。しかし、これを除く部分へは、ここに述べた延慶本と共通する。二条を西進する様を語る叙述が存在している。長門本には語り本や盛衰記に依拠した後次の本文形成の様相が指摘されており、右引用部もその一例かと思われる。島津忠夫氏「長門本平家物語の「考察」(『説話論集』第二集収 一九九二・四 清文堂)、川嶋進一氏「長門本『平家物語』の本文形成——語り本記事挿入箇所を検討——」(『国文学研究』120 一九九六・一〇)参照。

(5) いわゆる(史実)との距離を測るつもりはないが、実際の事件で採られたコースにそれなりの必然性があつたことは確かであろう。

(6) 弓削繁氏「平家物語南都本の本文批判的研究——読み本系近似の巻を中心に——」(名古屋大学国語国文学) 29 一九七一・一二、服部幸造氏「南都本平家物語(巻一)本文考」(大阪府立大学紀要(人文・社会科学)) 21 一九七三・三。

(7) 鎌倉本・平松家本・斯道文庫本・竹柏園本は、従来の指摘同様、この部分にも屋代本の本文をも継承した混雑性が認められる。屋代本の位相を測るという目的に鑑み、本稿ではこれらを直接の論述対象とはせず、注の中で少しく触れるに止める。

(8) 四部本の重盛は「左衛門陣・美福・朱雀・皇嘉門」を、頼政は「二条大宮大路」を固めている。大衆が「二条」を「西」へ進むことと併せて、そこでは大内裏二条面をめぐる攻防が独自に設定されている。とは言え、大内裏を舞台とする点は共通する。

(9) 『平家物語全注釈』上巻(一九六六・五 角川書店) 202頁以降。尚、前掲弓削氏は、この発言を受け、屋代本の形でも筋は通るとしているが、本稿はそれとは異なる観点に立つものである。

(10) 鎌倉本・平松家本には本話が存在しない。

(11) 八坂系第一類本・斯道文庫本には、(A)に相当する話が存在しない。

(12) 山下宏明氏「平家物語研究序説」(一九七二・三 明治書院) 70頁。

(13) 湿美かをる氏「平家物語の基礎的研究」(一九六二・三 三省堂) 中篇第四章、富倉徳次郎氏前掲書650頁以降。

(14) ここに見える頼政の二つの説話は、阪口玄章氏「平家物語の説話的考察」(一九四三・七 昭森社)等によつて、本来「十訓抄」第十に見えることき一つの話であつたものと推測され、現在に至る。当該話は和歌関連説話の中に配列されてはいるものの、人々の称賛が記された後、「頼政墓目の外に、征矢を取具して持たりけるを、後に人の問ひければ、『もし不覚かきたらば、申し行ひたりし人をぞいんがためなり』とぞ答へける」との一文が存し、中心的興味は頼政の武芸にあつたものと推察される。

(15) 例えば、『太平記』巻第十二「隠岐広有の怪鳥退治の場面でも、義家の鳴弦と頼政の鶴退治が想起されている。また、延慶本第二中「宮南都へ落給事付宇治ニテ合戦事」には、「源平両家ノ中ニ撰レテ、鶴射給タリシ大將軍ゾヤ。臆スル所ノ尤道理ナリ」という頼政評も存する(盛衰記に継承)。本話の受け止められ方は十分に窺えよう。(A)・(B)は「又」という語で繋げられており、「ヤサ男」は二語を受けた総括的な評価となつてと言えよう。池田敬子氏「やさし——軍記の武者像——」(『論集 日本文学・日本語3 中世』一九七八・六 角川書店)が軍記物語における用例を整理し、「やさし」という語と「文学・音楽に携わる能力」との関連を指摘している。

(17) 屋代本・南都本は巻第四を欠くため、そこから移したものは判断できない。

(18) 日下力氏「平治物語」成立期再考——中世軍記文学誕生の環境——(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』文学・芸術学編39 一九九四・二)、谷口耕一氏「平治物語の虚構と物語——待賢門の

軍の事」の章段をめぐって——(「語文論叢」22 一九九四・一)。

(19) 二類本B種奥村家本も同様。同A種彰考館本・京都府立総合資料館本では、平氏には小松殿三千余騎にて陽明・待賢・郁芳門にて三の門を堅らる。右衛門督頼盛・平宰相教盛二千余騎にて西南の陣を堅らる」と、二人は個別に記されていないが、特別扱いされていることに変わりはない。一類本との関係でB種本から引用した。

(20) 引用は岩波新大系『保元物語 平治物語 承久記』による。

(21) 古態本『平治』には、新大系脚注が指摘するように教盛と経盛に關する混乱が存在する(180頁注17等参照)。しかし、ここでは古態本の影響に限定してはおらず、金刀比羅本などの後出本で教盛に統一されていく過程を重視しておきたい。

新刊紹介

古典遺産の会編

『戦国軍記事典 群雄割拠篇』

戦国時代は全国的な戦乱の広がりの中で、地方ごと、合戦ごとにそれを語り継ぎ、書き留めた軍記が成立し、ある意味では軍記が最も多様な展開を見せた時期である。しかしこれら「戦国軍記」は一部が活字化されている以外は、ほとんど未整理の状態にあり、後期軍記研究の進展の大きな妨げとなっていた。本書はそれら「戦国軍記」を地域に分け、さらにそれを内容的に通史・年代記・家記・武侍記、戦場記に分類し、諸本、刊本、成立、内容等の解説を施したものである。特に「内容」の項は非常に充実しており、個々の作品の梗概から特色、問題点にまで解説が及んでいる。

(22) この想定に従えば、屋代本他の語り本では頼盛・教盛の名が消去されたこととなる。それは彼らが武人として作中に描かれていないことと関連しよう。また、竹柏園本などで重衡の名が現れるのは、その逆の現象かと思われる。

(23) 山田孝雄氏「平家物語異本の研究(一)」、「典籍」2 一九一五・七。春田宜氏による注(一)「掲載影印本解説に継承されている。

(24) 拙稿『平家物語』覚一本と八坂本の間——頼朝の存在感と語り本の展開——、「国文学研究」116 一九九五・六。『平家物語』諸本展開の側面——八坂本における俊寛の位置付けをめぐって——、「国文学研究」120 一九九六・一〇)などに述べたところ

(25) 例えば、一類本の東寺執行本は永享九(一四三七)年十二月朔日の讒語を持つ。

また巻末の諸家略系図、合戦年表も便利である。軍記研究のみならず、戦国時代史や郷土史研究に際しても必携の書と言えよう。

なお、今回は「群雄割拠篇」ということで、仁の乱以降信長登場以前の作品が対象となっている。本書によれば、それ以降を扱う続編が予定されているとのこと、そちらの刊行も期待される

ところである。
(平9・2 和泉書院 A5判 五六六頁 一五四五〇円) [田中尚子]

阿部一彦著

『太閤記』とその周辺』研究叢書一九九

本書は、著者の十八年間の業績である二十編の論叢をI『太閤記』の文学的研究・II『太閤記』とその周辺・III「反キリシタン文学論」の

三部に分けて収録したものである。研究が殆ど進んでいないといつても過言ではない近世初期実録物の研究分野において、今後の方向を位置づける記念碑的な論文集であるといえよう。

著者は、本文のなかで「史料によって確定しうる事実と「創作」の中間地帯をどのように処置するのか——中略——歴史文学の研究者にとってはここに何を発見し出すのが不可欠の課題である」と述べている。すなわち、実録物を史実確認の材料としてではなく、一つの文学作品として、享受の可能性を多方面にわたり追求しておられるのである。本書は、今まであまり注目されなかつた実録物を通じて、近世の大きな底流を汲み上げた一書である。

(平5・3 和泉書院 A5判 五〇六頁 一一〇〇〇円) [黄昭淵]